国語科

中西　果織・吉岡　大泰・岡本　恵里香

1　研究主題との関連について

（1）「教科等本来の魅力」について

東雲小学校・東雲中学校国語科が考える「教科等本来の魅力」とは，言葉を通して他者の意思を正確に受け止め，言葉を通して自分の意思を的確に伝えることであり，それによって得られる自己の価値観の変容・伸長を自覚することである。わたしたちが生きる現代社会には様々な言葉があふれており，あらゆる媒体を通して多くの情報が高速に行き交っている。これらの情報の中で，互いの感情をやりとりし，他者の価値観に共感し合える人間性を育むには，言葉への感度を高め，言葉を自在に駆使する力が必要である。さらに，言葉が成熟しないと思考力は育たない。わたしたちは，新しい状況や困難な状況において自分にとって必要な知識や考えを自己の内面から引き出したり，必要に応じて新たに外部から吸収したりするために言葉で考えを整理している。また，何かトラブルが起きたときその状況を言語化したり，自分の中に生じる葛藤や焦りを言葉にしたりすることで，気持ちが前向きになり新たな一歩を踏み出すこともできる。このように，自分にとって必要な言葉を学び，それらを自在に駆使して自分の意思をきちんと言葉にする学びはあらゆる場面において人生をより豊かにすることにつながるだろう。

さらに，教科等本来の魅力の１つとして授業の中で学習者が触れる教材が挙げられる。国語科の教材は，説明文や物語だけでなく詩や俳句，短歌，随筆や随想，評論文，伝記，古文や漢文など様々な文学がある。それら１つ１つの教材は，時代を超えて多くの人の心をつかみ，児童・生徒たちの言葉の感度を高める。優れた文学には，言葉１つにも意味があり，言葉によって導かれた作品世界には生きる上で重要なメッセージが込められている。児童・生徒たちは読む行為を通して自分がどういう人間なのかを考え自分と向き合い，内面的な行為である文学体験を豊かにすることで，感性を育むことができる。そして，その作品世界から自分が感じたことを他者と交流する過程で，自分とは異なる考え方や価値観に気づくことができる。根拠としてどの言葉に注目し，どんな理由付けをするかによって，同じ文章を読んでも感じ方の違いが浮き彫りになってくる。こうした経験を積み重ねることで，自分の考えが何を拠り所としているかを認識し，新たに気づいたことを自分の言葉で整理していくことで児童・生徒たちは自分の言葉をつくることができる。

このように，国語科は「言葉の」「言葉による」「言葉を通した」学びを根本にして，必要な知識を増やし，自己の思考力を育て，他者と関わり合うことで培われる言葉の力をもって自分自身と向き合うことができる教科であるととらえている。他者との関わりによって得られる自己の価値観の変容・伸長を自覚することが，国語科の「教科等本来の魅力」の一つであると考えている。

（2）「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

昨年度は学びの準備段階としての「しつらえ」と「自分と向き合うこと」に重点を置き，文学の読みにおける「教師の資質能力」について授業構想力，授業実践力の２つから明らかにしようとした。それにより，次のような教師の資質能力の具体が明らかとなった。（表１）

表１　昨年度の実践で明らかとなった国語科教師の資質能力の具体

校種・学年	児童・生徒が自ら作品世界に入り，主体的に関わるための「しつらえ」（授業構想力）	他者と関わり，「自分と向き合う」ための手立て（授業実践力）
小学校３年生「モチモチの木」	課題を解決するために「登場人物マップ」を作成する活動を取り入れることで，物語を読む必然性をもたせた。	発言の内容を板書で色分けして示したり，「登場人物マップ」を評価したりすることで，児童の発言を整理したり，児童の反応や話し合いの内容に合わせて児童の発言を取り上げたり児発問したりした。
小学校４年生「手ぶくろを買いに」	同じ作者が書いた別の物語（ごんぎつね）を前単元で学習することで，作品に共通するものへの理解を深め，物語を読む構えを作った。	物語の中に自分を登場させる創作活動を行い，児童が創作した作品をもとに中心課題を設定した。
中学校２年生「走れメロス」	「もしも転生して○○（登場人物）になったら，どう思うか」という問によって，初読のイメージから脱却した。	思考を中断させないために，グループ交流や一斉での指示を極力減らし，「個」の時間を多く設け，教師がリードしないようにした。

今年度は，国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力として，授業分析・評価力に焦点を当てたい。授業における評価には，学習の評価（総括的評価），学習のための評価（形成的評価），学習としての評価（学習者が主体となって行う自己評価）がある。評価は基本的に「児童・生徒の学習改善につながるもの」と「教師の指導改善につながるもの」の２つの性質があり，近年では学習者の自己評価に重きを置いた実践が多い。しかし，東雲小学校・中学校国語科では，評価の主体を「教師」に置くことで国語科教師の資質能力として，学習者の変容を適切に見取り，学習者と共に学習評価を共有していく教師の「評価基準，評価方法」に焦点を当てていきたい。そのために，評価の「目的・主体・対象・方法」を明確にし，学習者の変容を見取るための適切な方法について，授業実践を通して具体化していく。

また，教師の資質能力として大切な力の一つに，教材研究の力がある。国語科の教材研究とは，児童・生徒につけたい「言葉の力」の決定と教材分析の２点だと考える。つけたい「言葉の力」を明確にし，目指す児童・生徒の姿や目標設定をはっきりとさせた上でどのような教材を扱うのか，そしてその教材をどのように分析するのかが重要である。特に，教材分析は国語科教師にとって重要な能力だと考える。その教材を作品の特徴や文章構成で精密に分析し，児童・生徒の側からどのような問いや反応が出るのかを多様に想定することで「何を教えるのか」「どのように学ぶのか」が具体化する。（表２は，現段階で考える国語科教師の資質能力を規定したものである。）

表２　国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力（文学領域）

資質能力	国語科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・つけたい「言葉の力」を明確にし，学習者が主体的に学習課題を設定することを教師の立場から適切に支援すること。 ・一単元，単元間，一年間，6 年間，3 年間，9 年間の学びを見通し，単元におけるつけたい「言葉の力」を焦点化すること。 ・つけたい「言葉の力」に適した教材を見出し，作品が作られた背景や作品のもつテーマ，文章表現の特徴など，教材のもつ特性を的確に把握すること ・学習者の発達段階を考慮しながら他者と関わり自分と向き合う単元を学習者とともに創造すること。
授業実践力	・児童・生徒の主体性を引き出す発問や手立てにより学習者の気づきや問いを発展的，有機的につなげていくこと。 ・豊かな言葉が行き交う学びを支える対話の場を作ること。
授業分析・評価力	・学習者の発言や自己表現したものから学習者の変容を見取り，授業にいかす力。 ・学習の変容を見取るための適切な方法を定め，学習の記録を児童・生徒と共有して次の学習に活かす力。

国語科の教師の資質能力として，教材のもつ特性を教師の視点から的確に把握し，その魅力を最大限に活かしながら，他者と関わり自分と向き合う学びを創造することが重要であると言えるだろう。その上で，授業レベルにおける発問や言語活動をどのように決めていくのか，国語科教師の資質能力を検討していきたい。

２　本年度の研究計画

（１）研究の目的

究主題との関連から，本年度の研究テーマを昨年度と同様に次のように設定した。

国語科の研究テーマ

自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す「文学の読み」の授業づくり

文学とは，言語表現による芸術作品のことであり，詩・小説・戯曲文芸評論など「言語による」形象的表現だけでなく，絵本など文字のみに限らないものも含み多岐にわたる。児童・生徒達は文学という言語表現に触れる中で，これまでの自分の経験を想起したり，味わったことのない未知の体験を想像したりしながら自分自身と向き合っていくことができる。文学を読む学習には，他者に対して自分の思いを伝えるために自分の言葉をつくり，豊かに言葉を紡ぎ出すことを可能にする力があり，そのような児童・生徒の姿の発現を教師は目指している。その際に必要になってくるのが確かな教材研究である。教材研究とは，教材分析と授業構想の２つで構成される。児童・生徒達がどのような思いをもち，どう言葉を読むのか，この教材でつけたい言葉の力とは何なのか，教師は各々の視点で教材を分析し，授業を構想していく必要がある。そして，教師の教えたいことを教えるのではなく，その作品と児童・生徒達がどう向き合い，自分の言葉をつくっていくのかを吟味する必要がある。また，

児童・生徒が物語を確かに読めたという思いをもち，主体的に作品世界に入っていくためには，その土台となる知識・技能を指導していくことも必要である。例えば，物語の構成，時・場・人物の設定，場面，あらすじ，基本四場面（起承転結），語り手，視点，情景描写といった知識・技能を読解力の基礎として発達段階に応じて系統的に指導していくことも重要である。本年度の研究では，確かな教材研究とつけたい言葉の力を明確にした授業づくりを通して，自分と向き合う文学の授業を構想したい。このような考えのもと，本年度は「自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す『文学の読み』の授業づくり」３年目となるため，これまでの授業実践を積み重ね，「文学の読み」の授業においてどのような言葉の力をつけていくのか，そのために必要な教師の資質能力とは何かを明らかにしていきたい。

（２）研究の方法

○「国語科本来の魅力」に迫るために，自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す児童・生徒を育てる「文学の読み」の授業づくりの新たな授業実践を積み重ねる。

○「国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力」（表２）を定義し，その妥当性を検討する。

（３）各学年段階における目標

『文学の読み』の授業において，各学年段階における目標を示したもの（表３）を次に示す。

表３　東雲小・中学校『文学の読み』における各学年段階の目標

第Ⅲ期（中学校２・３年）

○　文学を読んで深く共感したことをもとに，自己の在り方を見つめてよりよい生き方について自分の考えをまとめることができる。

語彙力：豊富な語彙をもち，場や相手に応じて適切な言葉や効果的な表現を選択する。

思考力：言葉と言葉のつながりを正確に捉え，文章の中で最も言いたいことを読み取ると共にそこに込められた意思や感情を解釈する。

表現力：互いの自己表現を通して相手が伝えたいことの本質を理解し，物事を多面的に見ながら建設的な話し合いをする。

第Ⅱ期（小学校５・６年，中学校１年）

○　文学を読んで確かに理解したことをもとに，今の自分を見つめて考えたことや感じたことをまとめることができる。

語彙力：豊かな語彙をもち，複数の言葉からその場に合う適切な語や語句を選択する。

思考力：言葉と言葉のつながりを理解しながら読み，作品世界に直接表現されていないことを自分の言葉をつくりながらまとめる。

表現力：自己表現したものを話題にして感じたことや考えたことを話し合い，自分の考えをまとめる。

第Ⅰ期後半（小学校３・４年）

○　文学を読んで理解したことをもとに，自分の生活や経験を見つめて考えたことや感じたことを伝えることができる。

語彙力：語彙を増やし，様子や行動，気持ちを表す言葉の違いを意識して使い分ける。

思考力：言葉と言葉のつながりを考えながら読み，作品世界について客観的に理解したことをまとめる。

表現力：自己表現したものをもとに互いの考えの共通点や相違点を話し合い，自分の考えを広げたり深めたりする。

第Ⅰ期前半（小学校１・２年） ○　文学を読んで気づいたことをもとに，自分の気持ちを重ねて思ったことや感じたことを伝えることができる。 **語彙力**：物の名前，様子や行動，気持ちなどを表す語句の量を増やし，生活の中で使う。 **思考力**：話題に沿って言葉を選び，言葉をつなげて想像を広げながら作品世界をイメージする。 **表現力**：自己表現したものを素直な言葉で伝え合い，相手の言葉をきちんと受け止めて反応を返し，積極的に聞く。

（４）　目標達成のための手立て・指導

児童・生徒たちの「言葉の力」を育成するためには，どの学年においても児童・生徒たちの主体性を引き出す手立てが重要である。その中でも，児童・生徒が自ら作品世界に入り，教材に主体的に関わるために欠かせないのが「しつらえ」である。「しつらえ」は，作品世界に入る準備として，作品に登場する人や物について知ること，作者について知ること，同じ作者がつくったほかの作品を読むことなど学習者が学習に入る前に教材と出合う構えを作ることができる。また，学習者が心の扉を開放し，のびのびと自分が思ったことや考えたことを表現できるように，学習者同士の信頼関係を築くことも大切な「しつらえ」である。もう一つ，授業作りにおいて大切にしたいことは，児童・生徒の「変容の自覚化」である。しつらえによって作品世界に自ら入っていく児童・生徒と文学作品との初めの出合いを大切にし，児童・生徒が作品と向き合うところから学習課題を作りたい。そして，授業前に児童・生徒が抱いた「一次感想」と授業後の「二次感想」を用いて，児童・生徒自身が前の自分と今の自分を比べることによって自分をメタ化し，自己の変容を自覚できるようにしたい。そのために，教師が学習者をどう捉えて，どう評価していくのかを明確にもち，学習者が自らの変容を自覚できるようにしたい。さらに，前単元で自覚した自分の変容を次単元へとつなげることで学びの構造化をはかり，１年間の学びや９年間のカリキュラムの中で自分と向き合い，文学体験を通してよりよい生き方について自分の思いをもつことができるようにしたい。（図１）

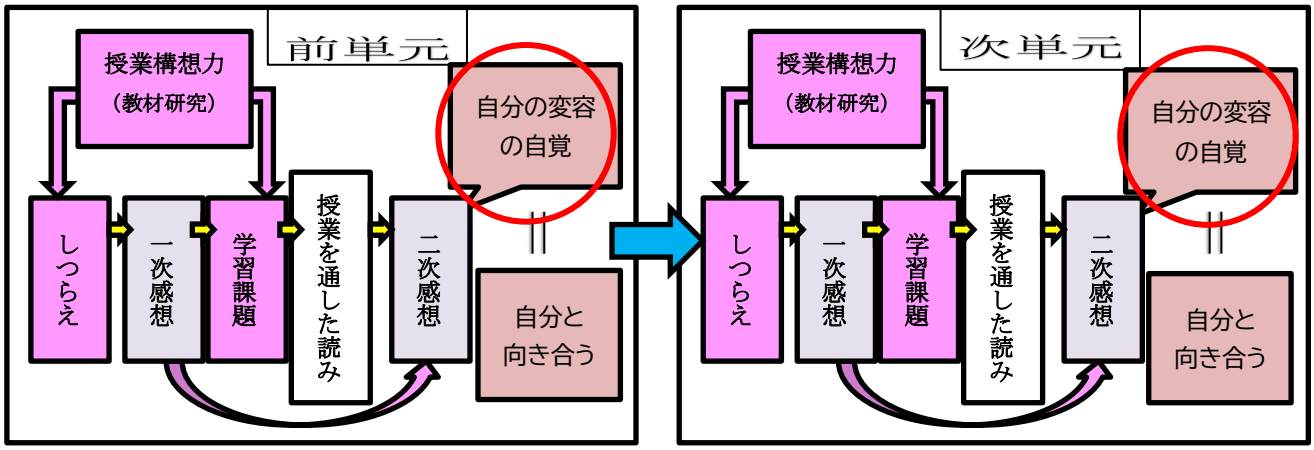

図１　自分と向き合う授業構想図

（５）検証の方法

○東雲小・中学校『文学の読み』における各学年段階の目標をもとに検証する。

【引用・参考文献】

全国大学国語教育学会編(2019) ,『新たな時代の学びを創る　小学校国語科教育研究』, 東洋館出版社
甲斐雄一郎・間瀬茂夫(2021) ,『新・教育課程演習第 16 巻　中等国語科教育』, 共同出版
山元隆春（2014),『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』, 渓水社
難波博孝・三原市立三原小学校（2007),『文学体験と対話による国語科授業づくり』, 明治図書
斉藤孝（2019),『国語力が身につく教室』, 大和書房
谷内卓生（2019),『新・読解力向上「自力読み」ベースの国語授業リノベーション』, 東洋館出版社